

最近のソ連学界における「経済的

社会構成体」の研究

小檜山 政克

マルクス主義の経済学、あるいはもっと広くマルクス主義の社会科学の哲学的基礎となっている史的唯物論の中で、「経済的社会構成体」というカテゴリーはひじょうに重要な位置を占めている。それでこのカテゴリーをめぐる理論的諸問題を深めていけば、われわれは社会科学の方法に関する哲学的な認識を進めることができるだろう。そのための一つの資料として、筆者の目にふれたかぎりでの最近のソ連学界(哲学および歴史学)のこの問題についての研究の動向を、若干紹介してみたい。

一 シェプトウーリン、ラージン編の

『史的唯物論』⁽¹⁾でのまとめ

最近のソ連学界における「経済的社会構成体」の研究(小檜山)

(1) Под ред. А. П. Шептулина и В. И. Разина. Исторический материализм. Москва. 1974. 本書は一九七四年にモスクワで出版されたもので、大学院学生(哲学専攻以外の学生)のための参考書であるが、そのために、対象についての基本的な説明と、論争の焦点、新しい問題関心などをうかがうのには便利である。本書の第五章で、「経済的社会構成体」の問題が扱われている。

右の書は、まずこのカテゴリーが社会、歴史の科学的認識にとってもっている意義について、レーニンが『人民の友』⁽²⁾とはなにか、そしてかれらはいかに社会民主主義者たちと闘うか⁽³⁾で述べているところを念頭におきながら、その基本的な点を次のように説明している。

(2) 『レーニン全集』、大月書店版邦訳第一巻、一二九ページ

以下を参照。

それは、社会についての学問の科学性がまさにこのカテゴリーの定立にかかっているという認識である。つまり社会に關する諸科学は、このカテゴリーをその方法的基礎としてのみ、はじめて真の科学たりうるという認識である。K・マルクスが『経済学批判』のまえがきで、彼の研究が到達した結論でもあり同時にまたその後彼の研究の導きの糸つまり方法的基礎となった基本的命題を定式化していることは、周知のとおりであるが、この命題をもって始めて社会諸科学は科学となったのだという明快な把握をしたのは、レーニンであろう。ところでその場合の科学性ということの意味はなんだろうか。もちろん学問の科学性ということ自体は大問題であつて、いまこの学界動向を紹介している筆者には、それについての諸説をあげて論ずる余裕はないが、しかしレーニンそして右の『史的唯物論』が主張している科学性の内容だけは紹介しておかなければなるまい。

「経済的社会構成体」というカテゴリーを定立する学説は、社会現象の認識に唯物論の原理を適用することから出発しているといえよう。それは第一に、「社会的存在」と「社会的

意識」という二つのカテゴリーの定立を理論的な前提としてゐる。そしてこの「社会的存在」が「社会的意識」を規定するというのがその根本的な命題である。

そもそも唯物論の立場からすると、もちろん自然と社会には相違があるけれども、両者はともに物質の運動形態であつて、そしてこの二つの運動形態は、それが客観的な諸法則に従うという点では共通である。こういう立場から、われわれは諸科学に共通な客観的な認識方法を社会現象にも適用していくことができ、そこで社会科学が真の科学となるのである。

「社会的存在」というのは生産諸関係のことである。マルクスは次のように述べてゐる。「……この生産諸関係の總体が社会の経済的構造をかたちづくるが、それは、その上に法律のおよび政治的上部構造がそびえたち、かつまた一定の社会的意識の諸形態が照応するところの、現実の土台である。

物質的生活の生産様式が社会的、政治的、精神的生活過程全般のものになる条件である。人間の意識が人間の存在を規定するのではなくて、その逆に、人間の社会的存在が人間の意識を規定するのである。³⁾これについてレーニンは、マルクスがこのテーゼの中で、いろいろ多面的な社会的諸関係の中

からとくに生産関係をとりだしてそれを社会構造として把握した点を、まず第一に重視している。マルクスのこの把握とどうか、本質的なものをとりだす科学的抽象、あるいは科学的操作と呼ぶべきものによって、われわれはこのとりだされた対象すなわち生産関係に、反復性というどの科学にも共通の基準を適用することができるようになり、その結果はじめて社会科学が真の科学になったのである。つまりそうすると、ほぼ同じ程度の生産の発展段階にたつ諸国に共通して反復される諸特徴を見つけ出し、それをもとにして諸国をグループにまとめることが可能になる。そして、その各グループの国々に共通の本質的諸特徴をとりだせば、それが一定の社会類型ということになり、それがすなわち構成体となるわけである。

(3) 『マルクス・エンゲルス全集』、大月書店版邦訳第十三巻、六ページ。ただし翻訳は必ずしも同書の訳文に従っていない。以下同じ。

さらに、このような社会体制の類型的把握は、歴史の科学的な時期区分および歴史の発展の内的論理の問題とも結びつくことになる。すなわちここで生産力の発展と生産関係の型との関係が解明され、それによって経済的社会構成体がつぎ

最近のソ連学界における「経済的社会構成体」の研究（小檜山）

つぎに交替していく過程の合法則性が解明されるのである。

「社会の物質的生産力は、その発展のある段階で、それが従来その内部ではたらいってきた現存の生産諸関係と、あるいは同じことの法律的表现にすぎないが、所有関係と、矛盾するにいたる。生産諸関係が、生産力の発展のための形態からその足かせにかわる。そのときに社会革命の時代が始まるのである。」⁽⁴⁾ それぞれの経済的社会構成体は、その内部にもつ矛盾が成熟して極限まで激化することによって、ほろび、そして矛盾の解決が新しい高度な社会体制の成立をうながす。この意味で社会進歩とはなにかという問題も経済的社会構成体の理論と結びついているし、さらには、社会の発展を自然的過程とみるマルクスの立場もこの理論と結びついているのである。（マルクスのいう「自然的過程」というのはどういふことなのか、筆者はこの問題に長い間関心をもってきたが、今もって完全にわかったとはいえない状態である。ここではとりあえず、生産力という人間と自然とのかわりあいを基底に、これと関連しながら人間の意識から独立して存在する生産関係と、その法的発展を、社会発展の土台とみる歴史把握というほどの意味におさえておくことにする。）

(4) 『マルクス・エンゲルス全集』、邦訳第十三巻、六ページ

次に「経済的社会構成体」というカテゴリーをどう定義するかという、わが国でも論争の対象となっている問題に移る。ソビエトの学界でも諸説まちまちといったところのようであるが、右の『史的唯物論』はむしろ諸説の共通なところをとりだそうと努力している。そして、(1)経済的社会構成体というのは歴史上の一定の社会類型であること、(2)社会現象を唯物論的に説明するものであること、(3)構成体というのは、どういふ要素を含んでいるのかというその構造を説明していること、(4)構成体の交替を社会進歩の弁証法の観点から説明していること、この四点は、どの学説にも共通であると指摘している。そして同書自身が「経済的社会構成体」に与えた定義は、「歴史的、具体的な社会類型、すなわち生産様式に規定され、その発生、機能、およびより高度な社会有機体への移行に関して、それ独自の法則をもつところの社会体制」というのである。

ところでやはり問題は右の(3)の点つまり経済的社会構成体には何がふくまれるのかということであろう。ソ連学界では、大別すると、三つの立場がある。第一は、経済的社会構成体とは結局のところ生産関係ないし生産様式のこととするも

の、第二は、それは土台と上部構造の統一だとするもの、第三は、それよりもっと広く考えて、いろいろな社会的ファクターの総体からなる複雑な社会体制だとするものである。いったいなぜこのようにいろいろな説が出てくるのだろうか。『史的唯物論』はその原因として次の二つの点をあげている。その一つは、経済的社会構成体という考えは、マルクスの中でしだいしだいに形成されていったという事情である。すなわち、『ドイツ・イデオロギー』ではまだ経済的社会構成体の若干の側面だけ、例えばその基礎の「所有形態」だけがとりあげられていたのに、『賃労働と資本』では、一定の歴史的発展段階にある社会が生産関係にまとめられて、それが『経済学批判』になると、経済とならんで社会的、政治的側面も指摘されるようになり、『資本論』にいたると、経済的社会構成体を形成するすべての要素が解明されているというのである（筆者はこのような説明をすんなりとのみこむことはできないが、ともかくそのまま紹介しておく）。もう一つの原因としては、マルクスが社会現象の研究にあたって、主として経済的側面をとりあげ、他の諸側面には必ずしもふれてはいないという事情が、あげられている。

そこでこの問題をレーニンはどう考えていたかという点だけれども、レーニンは前述の『人民の友』で、マルクスは経済的社会構成体という概念を生産諸関係として定立した、と述べている。したがって——といま紹介している『史的唯物論』は述べる——、厳密に文字どおりに考えれば、レーニンはこの概念を生産関係の総体としておさえていたことになる。しかしながらこの問題についてのレーニンの見解をもっと全面的にみていくと、そうはならないと同書は主張する。つまり、レーニンの『人民の友』での強調点は社会科学を科学とするために必要な唯物論的方法の特徴であったので、そのために社会現象の多様な諸側面を究極的に規定する土台としての経済関係について注意を集中しただけなのだというのである。(筆者はいまこの問題に深入りするつもりはないが、経済的、社会構成体というこ、とはは経済をさすのが当然であって、マルクスもレーニンもその意味で使っていると考えるのが、すなおだと思う。しかしながら、社会科学の方法論の問題として、今日の研究者が社会現象の認識のためのカテゴリーとして、この用語にそれよりも広い意味をもたせるとすれば、それはそれとしてまた別の問題である)。

さらに右の『史的唯物論』がとりあげている中に、抽象的、

最近のソ連学界における「経済的社会構成体」の研究(小楡山)

二一九 (四二三)

理論的なものと、歴史的、具体的なものとの混同という問題がある。これは、社会発展の具体的な諸段階と、一般的、理論的な概念である「構成体」とを同視する、これまでソ連学界にみられた誤まりの指摘である。「構成体」というのは、一定の社会類型に特有の、最も本質的な諸特徴を定立したものである。いうまでもなくこれらの諸特徴は、理論への現実の反映ではあるが、しかしそれは科学が現実を論理的に分析して、これら諸特徴を一定の意味で純粋な、一般化した形でとり出したものであって、そのことによって、多様な現実を分析する用具がつけられたわけである。この場合、「一般的なものを」をなにか自立した本質にしてしまうと、それは観念論になってしまふし、逆にまた、一般を個別に解消してしまふと、学問研究の中で、主要なものをそうでないものと区別したり、本質と現象を区別したり、必然的なものと偶然的なものを区別したりすることができなくなる。ともかくここで問題なのは、多様な具体的現実を一般的概念ないし抽象的な図式におしこめてしまふことによつて、抽象的カテゴリーをプロクルステスの寝台にしてしまふ危険である。そして現実をカテゴリーにおしこめなくなると、こんどは、そ

のカテゴリリーがよくないのだと言いだすことになる。アジアの生産様式についての論争の中でソ連の歴史学者の中にそういう主張があらわれた。つまり、従来の奴隷制ないし封建制についての観念では、奴隷制ないし封建制の時代の特徴をせんと説明できないというのである。

『史的唯物論』はこのような混同を批判しながらも、また一方で次のように述べている。史的唯物論のカテゴリリーが歴史学その他の社会科学の進歩および人々の社会的実践によって豊かになっていくのは当然のことである。経済的社会構成体の理論も、もし史料分析の結果必要なら、これまでのほかに新しくアジア的構成体あるいは初期階級社会構成体というものも考えてもさしつかえない、と。しかしながらくり返すまでもなく、経済的社会構成体というカテゴリリーは、超歴史的な「社会一般」というカテゴリリーに比べれば歴史的、具体的なものであって、人類史の具体的な発展段階の本質を表わしてはいるが、しかし他方でこのカテゴリリーは、もっと具体的な歴史そのものの段階と比べれば理論的・抽象的なものであって、それとの同視は誤まりである。これが同書のいいたいことのものである。

次に同書では経済的社会構成体というカテゴリリーの弁証法的とらえ方の問題がとりあげられている。弁証法のコアが、レーニンの言うように、統一物を二つに分け、矛盾対立するその二つの部分を認識することにあり、また弁証法の諸カテゴリリーは対立物の統一されたものでなければならぬとすれば、ここで問題になっている歴史の進行過程の最も一般的な矛盾というのは、安定性と変化性の矛盾であり、歴史はこの両者の統一の中で解明されなければならない。そして社会の発展過程がこのような矛盾の中で進むかぎり、そのことは経済的社会構成体というカテゴリリーの中味にも当然反映している。構成体というのは自己発展していく社会的有機体であるが、このカテゴリリーは類型的側面と発史的側面とがある。類型的側面というのはその社会タイプに固有の安定した諸特徴を確定する面であって、これらの諸特徴の総体が一定の体制となり、そこではその社会タイプの特徴が完全に成熟した発展段階のもとしてとらえられる。もう一方の発史的側面では、構成体の生成、機能、消滅が解明される。

資本主義的経済的社会構成体の研究の場合を例にとってみれば、『資本論』でマルクスが理念的平均の形の中でこの生

産様式の内的構造を分析しているのが前者の例である。この点でレーニンの次の指摘は有益である。「資本の理論は労働者が自己の労働力の価値をぜんぶ受け取ることを前提とする。これは資本主義の理念上の姿であって、けっしてその現実ではない。地代の理論は農業人口がすべて完全に、土地所有者、資本家、雇用労働者に分かれることを前提とする。これも資本主義の理念上の姿であって、決してその現実ではない。実現の理論は生産の均衡配分を前提する。これも資本主義の理念上の姿であって、決してその現実ではない。」

(5) 『レーニン全集』、邦訳第四卷、九〇ページ

類型的側面を検討する場合はその社会タイプがもっている相対的に安定的な質的諸特徴に注目するわけであるが、もしそれだけにとどまると、社会現象を単純化し、死んだものとしてとらえる誤まりをおかすことになる。ここに変化性の把握が大事なゆえんがある。マルクスが資本主義の発生史、その後の発展の過程、さらに新しい社会でのみ解決できるこの社会の矛盾の本質を研究したことは、いうまでもない。なお右の『史的唯物論』は『資本論』の序文のマルクスの有名なことば「私は経済的社会構成体の発展を自然史的過程とみ

最近のソ連学界における「経済的社会構成体」の研究(小楡山)

る」というのを、このようなコンテクストの中でも理解しようとしている。

さて経済的社会構成体というカテゴリーのもっている意義内容を明確にし、また限定していくと、当然そこに、このカテゴリーとそれ以外の社会科学上のまたは歴史認識上のカテゴリーとの比較関連の問題がおこってくる。『史的唯物論』では、まず「経済的社会構成体」というカテゴリーと「時代」というカテゴリーの関連をとりあげて、両者を次のように区別すべきであると主張している。すなわち「経済的社会構成体」というのは歴史の一定の段階の本質を示すものであり、これに対して「時代」とはその段階の歴史的・具体的なすべての内容を包括するものである。そしてこの点では哲学研究所の教科書『マルクス・レーニン主義哲学の基礎』(一九七二年、モスクワ)の立場に賛成できるといっている。

いいかえると、社会発展のそれぞれの具体的な段階としての時代というのは、相互にからみあった無数のモメントを含むものであるのに対して、構成体理論はその時代の本質、主導的諸傾向ならびに諸法則を解明するものである。

ところで更に次のような問題がある。歴史を大きく時代区

分してもそれは認識の第一歩に過ぎない。それぞれの時代には、その時代の主要な内容をなす社会的諸関係とならんで、古い時代の残りかすや典型的な発展の道からの一定の逸脱あるいは偏差などがある。そうになると、一定の歴史的時代の複雑な社会的諸関係の総体を把握するためには、「構成体」と「時代」というカテゴリーの間におかれる中間的な諸カテゴリーの体系が必要になつてくる。そのようなカテゴリーの体系をもとにしてのみ、一定の時代におけるひじょうに具体的で多様な国々を分類できるようになるのではなからうかと、『史的唯物論』は述べ、かかる中間的カテゴリーとして、学界で提案されている「亜構成体」、「国民構成体」、「社会有機体」、「地域」をあげている。

ところで今日世界歴史をみると、「第三世界」に属する諸国がますます重要な役割を占めているが、開発途上国の今後の発展については次のような問題がある。それは、従来資本主義的な社会諸関係にまで到達していなかった国々は、今でも必ず帝国主義の搾取を受け、また資本主義の段階を通らねばならないのか、それとも、現代においては、必ずしも資本主義を経ず、その段階を飛びこえて社会主義に向って進む

ことができるのか、という問題である。これは、人類社会が全体としては不可避的に通らなければならない社会進化の諸段階を、個々の国も通らなければならないのか、あるいは個々の国としては飛びこえることができるのかという問題である。

マルクスは、社会全体としては、その発展の中で歴史的に必然的に通らなければならないなどの一つの段階も、飛びこえることはできないとした。これらの諸段階は、発生的連関をもった各社会類型の序列をなしているわけであるから、社会進化の客観的論理を破り、その実際的内容をゆがめることなしには、そのどの一つの環をも投げずることはできない。けれども、現実の歴史過程は、その本質よりもはるかに豊かで複雑多岐である。歴史上の経験は、どの国もみなすべて構成体を必ず経なければならないわけではないことを示している。歴史家が明らかにしたこの事情は、「歴史上の相互関連の法則」と呼ばれるものである。この法則の本質は次のようなものである。すなわち一定の社会類型(構成体)がその生命を終えている場合、社会経済的發展が遅れていた国々は、進んだ国々の影響のもとに、すでに新しく生まれつつあるか、

またはすでにその歴史的時代を中心となっているより高度な社会類型に、いきなり移行することもできるといっているのである。

後進諸国の非資本主義的發展の途の本質は、先進諸国が資本主義的な基盤の上で形成してきたもろもろの客観的・主体的な、社会主義の前提条件を、漸次的に成熟させていくことにある。非資本主義的な發展の途においても、かつて資本主義諸国が通った途を、たとえ違った社会的・政治的狀況のもとで比較的短期に進むにせよ、ともかく通らなければならぬ。レーニンはこのような移行が長期かつ複雑であることに注意をよびおこし、その場合、資本主義以前の經濟を社会主義へみちびきうる中間的な諸段階を的確に規定する必要があることを強調した。

なお最後に、經濟的社会構成体の序列の終りに立つ「共產主義的構成体」について『史的唯物論』が述べている処の若干を紹介しておく。

「共產主義的構成体」という概念を抽象する場合には、他の構成体の場合と本質的な違いがある。それというのは、例えば、資本主義的構成体というカテゴリーの場合には、現実

存在する諸国のもつ本質的諸特徴をえらびだし、一般化・理論化することによってそれがつくられるわけであるけれども、共產主義的構成体というのはそれが将来社会のモデルだという性格をもっているからである。もちろんこのモデルは、資本主義的構成体の分析、その機能、發展、消滅の諸法則の理論的分析にもとづいて、論理的に導きだされたものではあるが。もちろん将来社会についての科学的な予見というものは、空想ではなく、社会進歩の客観的な本質の理解にもとづいていることは、いうまでもない。

またこの場合、共產主義社会の抽象的、理論的モデルというものは、資本主義の抽象的、理論的モデルがただ一つしかないように、やはりひとつしかありえない。資本主義社会の本質からおこる諸矛盾からみちびきだされるのは厳密に限定された将来社会のタイプである。それは客観的な論理的な諸前提からは唯一の理論的結論がみちびきだされるのと同じことである。そして共產主義とは、生産手段の私的所有を廃止するという点において、それ以前の搾取社会と根本的に違うことが基本である。ただしこのような基本すなわち普遍性をもった理論的命題は共產主義社会の本質をあらわすだけであ

って、その具体的なかたちは、各国の具体的条件に応じて多様な形をとる。各国における社会主義への社会の改造の性格、社会主義の秩序は決して一様なものではありえない。社会主義建設の実践は、一国の経験そのまま他国におしひろげるのがいかにか危険であるかを、はつきりと示している。一般理論モデルとしての社会主義建設過程の共通性は、その現象形態の無限の多様性を前提とするのである。

シュエプトウーリン、ラージン編『史的唯物論』は以上のよう
うに述べている。

二 ポルシュエフの報告

ソビエトの著名な歴史学者故ベ・エフ・ポルシュエフが一九七二年に行なった報告⁽¹⁾の中の、いくつかの注目すべき点を紹介しておくことにする。

(1) Институт всеобщей истории. Проблемы социально-экономических формаций. — историко-типологические исследования. — Москва. 1975. стр. 25-39. の報告は、一九七五年にモスクワで出版されたソ連科学アカデミー世界史研究所編の『社会経済構成体の諸問題、——類型史的諸研究——』という書物に「構成体の交替にあたっての社会革命の役割」と題して収録されている。

最初に「構成体」という用語が地学からの転用であるという点について。これはわが国でも周知のことであるが、ポルシュエフは次のように指摘している。この用語は歴史的な意味と構造的な意味の二つを同時にもっている。それはもともと一定の順序で地殻にかたづけられた形成物である。またそれはプロセスを示すものであると同時に結果を示すものである。したがって経済的社会構成体という場合にも、それは単に歴史の現象を示すだけではなく、まず何よりも形成過程を示すのだ。しかもその場合地学におけると同じように、経済的社会構成体も時間的序列についての考えと結びついている。地学において構成体は、その前に何があり、その後何があったかが判明しなければ、無意味である。歴史的構成体も、それは世界史の進歩の上で継起的な諸段階が続く法則なのである、と。

共産主義の思想は、世界史の過程で経済的社会構成体がつきつきりに交替していくという思想に直接立脚している。もとはつきりいえば、構成体理論の中を潜在的に支配しているのは「社会主義」、「共産主義」の観念である。なおマルクス主義に反対する立場からは次のように主張される。マルクス

主義は十九世紀中葉の現実を説明する上では正しかったかも知れないが、しかしそれ以外の時期、つまりそれ以前あるいはそれ以後の歴史には適用できないのではないかと。そして現代は資本主義の性質が根本的に変わってしまったのだから、共産主義によってそれを否定する法則はもはや出てこない。このような主張の場合、資本主義という觀念が、諸構成体の継起という歴史の法則の中でとらえられず、それは理論的に切りはなされているわけである。

ボルシュネフは、これまでソビエトの学界で構成体理論の研究が一定の成果をあげてはきたけれども、その研究の一番の欠陥は、資本主義なり社会主義なり封建制度なりそれぞれの構成体がばらばらに検討されている、つまりそれぞれの枠の中でのみ研究されていて、ひとつの構成体から他の構成体への移行の法則にほとんど注意が払われてこなかったことであると、指摘している。

また彼によると、人類史を三段階シエーマに区分しようとする試みは、中世にもあったし、ルソーにもあった。ところがヘーゲルがそれを五段階区分にした。すなわち、(1)前史状態(普遍的不自由)、(2)古代東洋(一人の自由——専制政治)、(3)ギ

リシャ・ローマ世界(少数の人々の自由)、(4)中世のドイツ・キリスト教世界(全員の名目的自由)、(5)全員の現実的自由(フランス革命に始まり、プロシヤで繁栄しているもの)というわけである。

マルクスはヘーゲルからこの五段階区分を受けついでそれに新しい内容を盛った。いうまでもなく、世界史の時代区分の基礎に、所有形態の交替を、生産力発展を基盤にした経済関係の動態というものを、置いたのである。ヘーゲルの場合と似て、マルクスの場合にも個人の完全な不自由(これは「原始共産制」の反面の事態である)から、共産主義における自由と平等と理性の勝利へと歴史は進んでいくのである。その中間の三段階(奴隸、農奴、賃労働)については、マルクスはこういう段階区分をサン・シモンとその一派の人々からとってきたが、しかしその際マルクスはこれら三つの体制のもつ敵対的性格というものをばくろした。

なおソビエトの学界では、資本主義以前の三つの構成体すなわち原始共産制、奴隸制、封建制を、あるいはすくなくともその中の奴隸制と封建制を、それらが人身的、経済外的結びつきにもとづいているので、その意味では、物的、経済的

結びつきにもとづく資本主義とは違うのだからとして、この三つの構成体を統合しようとする試みがある。しかしボルシユネフはその場合の「人身的結びつき」のとらえ方は、問題の経済の本質を十分把握していないと批判している。経済学上の意味での所有には、(1)人間に対する所有と、(2)物つまり生産手段と生産物に対する所有とがある。そして歴史では長い間この第一の所有が有力な位置をしめていた。この経済学的意味での所有を、伝統や暴力や法的規範のような制裁、奨励などに類するものと区別する必要があるだけなので、そもそも「経済外的強制」という用語はまったくかっこつきのものであって、「市場関係以外の強制」を意味するに過ぎないのであり、奴隷制度ないし農奴制度の諸関係が経済の領域のそこにあることを意味するのではない。奴隷制度における搾取の基礎は人間に対する所有であり、資本主義における搾取の基礎は物的生産手段の所有にあり、そして両者の中間としての封建的搾取の基礎は、一つは人間に対する不完全な所有、もう一つは最重要な物的生産手段である土地およびその他の若干の物的手段に対する所有にある。

経済的社会構成体は大きな三分法としては、原始共同体社

会——敵対的社会——共產主義社会となる。このうちの敵対的社会についての小さな三分法は、奴隷制——封建制——資本主義となる。そしてぜんぶで五つの構成体が歴史の弁証法の論理に答える弁証法的全体をなしている。というのはいくば次のようなことである。すなわちボルシユネフの表現をそのまま紹介すれば、「マルクス『資本論』第一巻第二章の全バトスは、まさに、封建時代の勤労者からすべてを奪った資本主義に加えられると予言されている報復』こんどは収奪者が収奪される。』ということば以外の何物でもない。ここにみられるように、社会主義への移行は否定の否定という形で宣告されている。」このように五つの構成体は、単に生産力の継承性によって結びついているだけではなく、社会革命の形による相互否定によっても結びついているのである。そしてそれぞれの敵対的な構成体の発展は、発生、成熟、衰退の主要な三段階があり、そして第三の衰退の段階は新しい生産力と支配的生産関係の間に不適合が生じているという点に特徴がある。

なお最後にアジア的生产様式の問題についてのボルシユネフの見解を紹介しておこう。彼は前に紹介した『史的唯物

論』の著者たちと違って、いわゆるアジア的生産様式を主張する論者をまっこうから批判している。そしてこうした議論は、今日の東洋史研究者の経験的観察や結論にもとづいたというよりもむしろ、構成体理論の発生経過をよく調べず、また構成体を他のもので代用しようという試みから生まれたものだといっている。またマルクスが『経済学批判』のまえがきで、経済的構成体として、アジア的、古代的、封建的、近代ブルジョア的生産様式という風に列挙している中のアジア的生産様式という用語については、それをもって特別な生産様式定立の根拠とする議論は、マルクスの時代の歴史学の水準についての認識の不足からくる誤まりだとしている。マルクス、エンゲルスは一八四六年に『ドイツ・イデオロギー』で史上四つの所有形態すなわち種族的、古代的、封建的、ブルジョアの形態をあげていた。その場合種族的形態というのは、階級形成以前の原始的形態の意味であった。マルクスが一八五九年に史的唯物論の本質を概括する文章でこの重要な一環を忘れて、その代りに「アジア的」という別の形態のことを言い出したなどは、とても考えられない。しかもこのような用語を、その後マルクスは全然使っていないのである。

最近のソ連学界における「経済的社会構成体」の研究（小檜山）

二二七（四三一）

この場合の「アジア的」という形容詞は、当時の歴史学界では「原始的」という意味で使われていたのである。それはサンスクリットの発見とか、アジアとくにインドを人類の原住地とみる見解が広まっていたことの影響もあって、そう使われていたのであった。マルクスもインドの共同体、より正確にはその遺跡についての記述を、人類史の一番始めに無階級共同体体制が存在したことを証明する重要な証拠とみなしていた。ところが後になって科学が進歩して、このような考えがアジアの資料だけでなくヨーロッパやアメリカについての資料によっても確認されるようになると、マルクスはもはや「種族的所有形態」はもちろん「アジア的生産様式」という表現を使わず、他の用語例えば「原始共産制」という用語を使うようになったのである。

ソビエトの歴史学者故ボルシュネフは、一九七二年にこのように述べていた。

（本稿は、一九七六年五月七日立命館大学経済学部共同研究会で行なった報告をもとにして、それを文章にまとめたものである。なお、「経済的社会構成体」の亜概念ともいうべき「地域」という新しいカテゴリーについては、バルクその他の学説をもっとくわしく紹介しないと、本稿の表題の趣旨に十分に沿うものにはならないのであるが、この課題を果さなかった点についてご寛容いただければ幸いである）。